

## 国語編-1：漢字に見る知恵

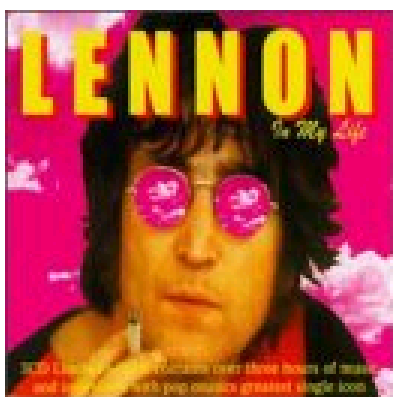
矢澤 洋爾



かつてアメリカにいた頃、日本語を勉強している女子学生が彼女の友人相手に次ぎのような話しをしているのを小耳に挟みました。

「日本語って難しいよ。一つ一つの言葉を覚えたのにそれが全然役立たないんだよ。だって、い〜い。presence (現) と elephant (象) が合わさると phenomenon (現象) になるんだよ。こんな事ってあり?!」

確かに言われてみればその通り。象を elephant でなく figure と見てくれればともかく、どうしてそうなるんだと聞かれても答えに窮してしまいます。



眼「鏡」?

もっと身近なところで言うと、「眼鏡」も考えてみると不思議です。だって「眼」の「鏡」ですよ。眼の前に鏡なんかがあったら何も見えないではありませんか? 似たような例が望遠鏡であり、顕微鏡です。反射式望遠鏡の方が先にあったのならともかく、望遠鏡はあの形態からしてむしろ望遠筒と言ったほうが素人にはわかりやすかったのではないのでしょうか。どうやら我々の先達は「レンズ」の訳に「鏡」の字を当てたという事のようなのです。当時光学の知識がどれだけあったのかわかりませ

んが、なかなか名訳というべきでしょう。

漢字が成立したのは紀元前 13 世紀から 11 世紀であるとか。(漢字源：学習研究社による) その頃から将来の科学の発見を予測するかの様に字が用意してあることに驚きます。

例えば「電」と言う字。カミナリは昔から天体现象としてあったでしょうから「雷」という字があることに驚きは感じません。でも電気が発見されるのはずっとあとです。平凡社の世界大百科によると「磁気現象と電気現象との区別を確立したのは、16 世紀のイタリア人 G. カルダーノである。」とのこと。フランクリン (1706-90) が雷が電気現象である事を確認するのも 18 世紀です。「雷」にしてみれば、髭をつけてやって軒下を貸したつもりが、3000 年後に母屋を乗っ取られるとは思っても見なかったでしょ

う。

胃、腸、肺、腎、肝など内臓に一つ一つ字が割り当てられているのも驚きます。腹とか胸とか頭とかなら目に見えるから字があって当然でしょう。が、人体内部の臓器となると、解剖医学の知識がなければ字を割り当てることは不可能だと思われま。でも今から 3000 年も前、杉田玄白 (1733-1817) が解体新書を著す 2900 年も前に中国人は人体の内部構造を知っていたとしか思えません。

その一方でどうしてこんな字がないのだろう、と思われるものもあります。

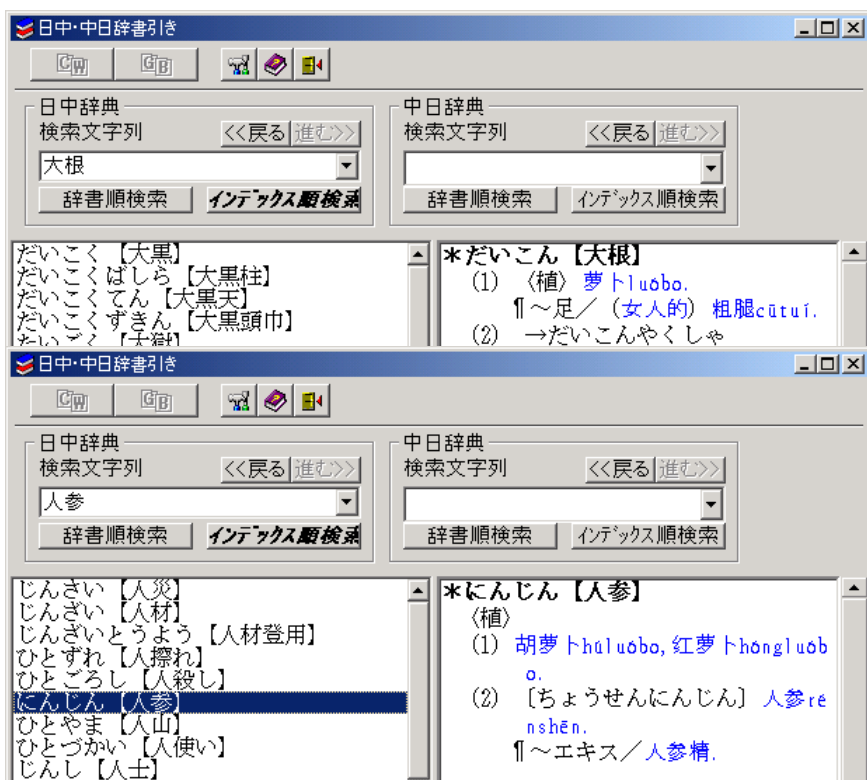
例えば「大根」です。「人参」だって「白菜」だってそうです。松、杉、桜、梅、ですら一字の漢字が与えられているのに、人間生活に密着したこうした植物に字がない所を見ると、こういう野菜が歴史的に新しい品種である事が想像できます。五穀といわれる「稲・麦・粟・稗・豆」はちゃんと一字が割り当てられてます

ものね。五穀は漢字の成立当時からあった古い品種の植物ということでしょう。

ちなみに「大根」を中国語に直すと左図のとおりです。夢と言う字に似ていますが四と夕の間のワを取った字で日本の漢和辞典には出てきません。ついでに「人参」を日中辞典で引いて驚きました。

(左図) 中国語では「人参」は「胡の大根」なんです。素直に考えれば「大根」は漢字が

成立した後かなりたってから人間が作り出した。「人参」はそれより更に後に、辺境の異民族からもたらされた、という事になりましょうか。



「信長の朝ごはん龍馬のお弁当」俎倶楽部編毎日新聞社と言う本によれば、正倉院文書に「大根 1 本と米一升がほぼ等価値」である旨の記録があり、当時大根は薬効のある食物として扱われていたそうです。

「胡」というのは中国北方や西方に住む遊牧民族の総称で、転じて外地の産物である事を表す言葉になりました。

「胡椒」や「胡麻」にその名残があります。この「胡」について面白い話があります。

秦の始皇帝は自分が作り上げた帝国の永遠の繁栄を夢見ました。諡（おくりな）を廃し自らを始皇帝としたのもその現れで、「二世、三世より万世に至り、之を無窮に伝えん」これが始皇帝の「我が栄光の秦は永久に不滅です」の宣言でした。が、「秦を滅ぼすものは胡ならん」との宣託を受けます。これを北方民族の侵入と解釈した始皇帝は万里の長城を築いて予防策を講じるのですが・・・始皇帝の死後、長子の扶蘇と弟の胡亥の間で内紛が起こります。権力欲に取りつかれた宦官の趙高は賢明な扶蘇ではなく愚弟の胡亥を盛り立てて帝位につけます。始皇帝が死んだ時、扶蘇が遠征に出ていた事も不運でした。権力を握った趙高は胡亥を傀儡にして滅茶苦茶をします。これが秦滅亡の原因になりました。まさに「胡」亥によって秦は滅んだのです。（閑話休題）

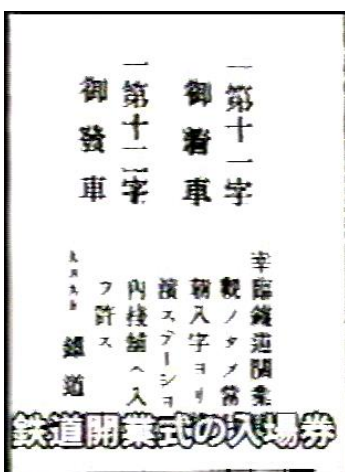
さて、当然昔からあったらと思うのにそうでない、という例もあります。



「駅」がそうです。左の写真は「旧長浜駅舎鉄道資料館」に展示されていた明治 15 年当時の看板の複製です。乗り降りする場所をステーションと書いてその説明が書かれています。

明治の当時の人々はステーションをすぐに「駅」だとは思わなかったのです。「駅」という字は、それこそまさにステーションを表すために古代中国人が先見の明をもって用意した字であると思えないのですがそうじゃないんですね。

先日近くの図書館に「日本鉄道史」（制作：株式会社 NHK ソフトウェア）というビデオがあったので借りて見ました。そのビデオの中に新橋・横浜間が開通した時、新橋で売られた切符（当時







者を出したのは概念の日本語化（漢字化）が巧みだったからだとは言えますまいか。

朝永振一郎の著書「量子力学と私」を読むと当時の苦労がうかがえます。客観的に歴史を振り返ると、プランクの量子仮説が出たのが 1900 年、シュレーディンガーやハイゼンベルグにより量子力学が確立されるのが 1920 年代の半ば、その中で朝永振一郎が「量子力学」を出版するのが 1948 年。20 年ちょっとで「量子力学」という言葉を生み出しているのです。

ところで「量子力学」を英語で何と言うか知ってますか？「万有引力」はどうですか？「原子」がアトムで「電子」がエレクトロン、あたりまでは分かりますが「分子」を英語で何と言うかとなるとちょっと心もとない。「量子力学」となるとまったくお手上げです。それだけ現代物理用語は我々の血となり肉となっている証左と言えましょう。

一方でコンピュータ用語は・・・・・・・・

「選択したオプションはファイルをシステムにインストールする、システムからアンインストールする、または両方を要求します。必要とするファイル操作を実行中にロックされているファイル C:\¥WINDOWS¥SYSTEM32¥msvc60.dll を検出しました。システム上のこのファイルをアンインストールする場合は〈キャンセル〉ボタンをクリックして下さい。セットアップによるファイル操作を再試行するには〈再試行〉をクリックして下さい。またシステムが再起動するときには操作を実行するには〈再起動〉をクリックします。」

だから私は何をすればいいのでしょうか？

海外からの概念を日本語化する困難さはどこに本質があるのでしょうか。かの物理学にしたって、energy はいまだに「エネルギー」ですものね。コンピュータ業界だけに苦言を言ってもしょうがないかな。ちなみに energy は中国では「能量」と言うようです。



(2004. 6. 21)